



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2531 号 2015.7.10 発行

欠かせないメディア 「テレビ」は50%

NHKニュース 2015年7月8日

NHKが5年ごとに行っている日本人とテレビに関する調査で、「欠かせないメディア」としてテレビを挙げた人の割合は50%と、メディアのなかで最も多くなりましたが、5年前に比べ5ポイント下がりました。

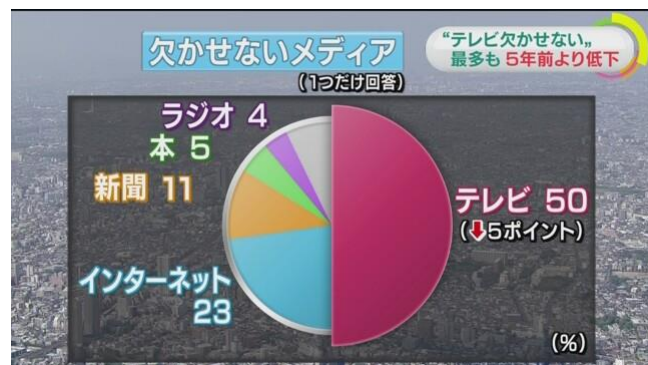
この調査は、NHK放送文化研究所が5年ごとに行っているもので、ことし2月から3月にかけて、無作為に選んだ全国の3600人にアンケート用紙を配布し、2442人から回答がありました。

欠かせないメディアを1つだけ答える質問で、「テレビ」と答えた人は50%と、メディアのなかで最も多くなりましたが、前回に比べると5ポイント低下しました。

次いで、「インターネット」が前回より9ポイント高い23%、「新聞」が3ポイント下がって11%などとなっています。

また、メディアを利用する頻度についての調査では、「テレビを毎日見る」人は79%で、メディアのなかで最も多くなりましたが、5年前から5ポイント下がり、「インターネットを毎日利用する」人は11ポイント増えて38%、「録画したテレビ番組を毎日見る」人は倍に増えて16%などとなりました。

1日にテレビを見る時間については、「4時間以上の人」が37%と3ポイント下がったのに対し、「ほとんど・全く見ない人」、「30分から2時間までの人」が合わせて5ポイント増え、調査を始めた昭和60年以来初めて短時間化の傾向を示しました。



職員が動けば組織も動き出す 社会福祉法人の人事マネジメント

福祉新聞 2015年07月08日 長谷川文徳・社会福祉法人誠信会理事長

「まち・ひと・しごと創生総合戦略」(2014年12月27日閣議決定)により、地方創生として人口減少や生活の多様性への対応が論じられています。このことは社会福祉法人制度改革や各制度と連動して、地域福祉の流れを加速させるでしょう。これから社会福祉法人は、地域を基盤としたさらなる活動が求められます。

さて社会福祉法人が実践してきた施設運営は、施設の維持管理、規則や秩序への準拠、ルーティンワークの尊重、マニュアルの重視など組織を恒常化させてきました。

その結果、私たちの法人では「現状維持バイアス」が働きやすく、内向的な組織風土が作り上げられていました。この「現状維持の施設運営」からの脱却が、変化する社会から求められている社会福祉法人の課題でしょう。

課題克服のため組織が、目標を持って進むべき中長期計画の策定、職員が目標を持って成長する人事システムの構築など、「現状の維持管理」から「未来の目標管理」へと意識改革を進める必要があります。



長谷川文徳 社会福祉法人誠信会 理事長（静岡県富士市）

また当法人では①「誠信会の進化論」＝進化できる組織②「DNAを継ぐ者」＝創立理念の尊重③「しあわせの種をまく仕事」＝福祉の使命-など、職員と共有する価値観の言葉を掲げました。

これらの試みが職員のやりがいにつながり、地域・企業・行政が協力して市内全域の

小学生と「森の自由研究おたすけ隊」を結成したり、地域と福祉事業所の交流を深める「桜まつり」を実施したりするなど、職員が率先して活躍する場を生んでいます。

ふくしの里で遊ぶおたすけ隊参加の小学生たち

また職員のやりがいは地域をひきつける魅力にもなっています。「職員に活気があるね」「明るい雰囲気ですね」「みんな若いね」などと地域の方々から声をかけられ、人が集まる環境が生まれています。そして、それがさらなるやりがいにつながっています。



これから社会福祉法人には、非金銭報酬・ワークライフバランス・育成システムの充実などの人事マネジメントによって、職員が主体的に活躍する環境づくりが大切になるでしょう。（長谷川文徳・社会福祉法人誠信会理事長）

患者死亡 准看護師らを傷害致死容疑で逮捕



NHKニュース 2015年7月8日

3年前、千葉市にある精神科の病院に入院していた男性患者を暴行して首を骨折するけがを負わせ死亡させたとして、警察は、病院の准看護師と元准看護師の2人を傷害致死の疑いで逮捕しました。警察の調べに対して元准看護師は容疑を否認し、准看護師は黙秘しているということです。

逮捕されたのは、千葉市中央区にある精神科の「石郷岡病院」の准看護師、

菅原巧容疑者（62）と病院の元准看護師、田中清容疑者（66）です。

警察によりますと、2人は3年前の平成24年1月、千葉市中央区にある精神科の石郷岡病院に入院していた、当時33歳の男性の着替えを介助していた際、顔の辺りを足で蹴ったり膝で押さえたりして首を骨折するけがを負わせ、2年後に死亡させたとして傷害致死の疑いが持たれています。

警察は、家族からの被害届を受けて捜査を進め、病院の監視カメラを解析した結果、男性の顔付近を足で蹴る様子が映っていたことなどから、こうした暴行が死亡の原因になったと判断したということです。

警察の調べに対して菅原容疑者は黙秘し、田中容疑者は「業務上の行為だった」と否認

しているということです。

逮捕されたことについて病院側は、「病院の職員と元職員が逮捕されたことは大変残念に感じている。今後の捜査に協力していきたい」としています。

障害者雇用促進へ見学会 徳島市の国府支援学校

徳島新聞 2015年7月8日



生徒（手前）の作業学習を見学する参加者＝徳島市の国府支援学校

障害者の雇用促進につなげようと、徳島市の国府支援学校で7日、企業・団体向けの見学会があった。県総合教育センターなどの「はたらくサポートプロジェクト」の一環。

県内の運送会社やNPO法人、自治体など16団体が参加。高等部の生徒がベッドのシーツ敷きや机の清掃、飲食店での接客といった作業学習に取り組む様子を見て回った。

ビル管理会社でつくる徳島ビルメンテナンス協会の多田

英人副会長は「生徒の礼儀正しさをひたむきさがよく分かった。協会全体で採用を考えるきっかけにしたい」と話した。

同校には現在、知的障害のある児童生徒278人が在籍する。今春に高等部を卒業した55人のうち、就職したのは10人。他は障害福祉サービス事業所に通所・入所するなどしている。

自慢のシカ肉ハンバーグ発売 登別の障害者支援施設

北海道新聞 2015年7月8日



フロンティア登別が発売した新商品「鹿バーグ」（左）と試食用メニュー

【登別】市中登別町の障害者就労継続支援施設フロンティア登別（山田大樹施設長）が、白老産エゾシカ肉の冷凍ハンバーグ「鹿（ユク）バーグ」を発売した。ジビエ（野生動物の肉）ならではの香りと、脂肪の少ないヘルシーさが売り。エゾシカ肉活用と障害者就労の両立を目指す、期待の商品だ。

鹿バーグは白老周辺の猟師が仕留めたシカ肉と野菜などをミンチして製造。室蘭市の食品加

工業「池田屋」と1年がかりで商品開発し、6月12日に発売した。重さ100グラムで280円。商品名の「ユク」はエゾシカを意味するアイヌ語だ。

こだわりはアレルギー原因物質の小麦粉や卵、牛乳を使わず、幅広い体質の人が食べられる点。つなぎに米粉を用い、肉汁を保つためコンニャク粉も取り入れた。山田施設長は「試行錯誤を重ねて、おいしい商品ができた」と胸を張る。

施設を運営する社会福祉法人ホープ（白老町）は、シカ肉の解体処理施設を町内に持ち、アイヌ民族博物館（同）内の喫茶店で食事を提供してきた。本格的な加工食品は今回が初めて。鹿バーグはフロンティア登別のみで購入できる。問い合わせは同施設（電）0143・83・7878へ。（石川泰士）

弘前市商品券：先月販売で即日完売 低所得世帯で買えず 毎日新聞 2015年07月08日

◇割引券利用率が低率に 苦情2800件

青森県弘前市は6日、先月販売された市プレミアム商品券が即日完売した結果、同商品券を市発行の割引券で安く購入できるはずの子育て世帯や低所得世帯などの割引券利用率

が28～44%の低率にとどまったと発表した。割引の事業費（約1億5100万円）の財源は大半が国の交付金。市は未使用による余剰金を約8300万円と見積もり、これを元手に別な消費喚起・生活支援事業を構築できるか、月内に判断するとしている。

弘前商工会議所と岩木山商工会は、額面1万2000円の商品券を1万円で買えるプレミアム券を6月26日、12万8000セット発行し、即日完売した。

市は事前に、18歳未満の子供がいる世帯や、市民税非課税などの低所得世帯などに対し、プレミアム商品券の購入時に使える4000～1000円の割引券を送っていた。

当初、市は「発行日から3日間で完売」と想定していた。だが即日完売してしまったため、子育て世帯や高齢者らから「商品券を買えない」「割引券を使えない」などの苦情や問い合わせが発行日から8日間で約2800件寄せられたという。

1日現在で子育て世帯の割引券利用率は44%、福祉世帯は28%、高齢者は30%にとどまった。市は「プレミアム券12万8000セットに対し割引券を約9万5000枚発行したのは多すぎたかもしれない。見通しが甘く混乱を招いた」と陳謝した。【松山彦蔵】

義手、義足テーマに世界大会 神戸で2019年開催 神戸新聞 2015年7月8日

世界から義肢装具士や医師、リハビリ関係者らが集まる「国際義肢装具協会（ISPO）世界大会」が、2019年10月7～10日、神戸市中央区で開かれる。国内では1989年の神戸市以来、30年ぶり2度目の開催。2020年の東京パラリンピックを前に、義手や義足、補装具が必要な人へのサービス向上を目指し、国際的な機運を盛り上げる。（斉藤正志）

ISPOは1970年にデンマークで設立され、2010年からベルギーに本部を置く。世界大会は2、3年ごとに開かれる。19年の会場はポートアイランドの神戸コンベンションセンターと神戸ポートピアホテルで、約70カ国から理学療法士、作業療法士ら約5千人が訪れるという。

日本支部は三田市の神戸医療福祉専門学校三田校にある。同支部会長で、県立リハビリテーション中央病院（神戸市西区）ロボットリハビリテーションセンター長の陳隆明さんらが世界大会の誘致を企画した。

同センターは昨年6月、訓練用の義手を貸し出す「小児筋電義手バンク」を設立。最先端技術を導入してリハビリに生かしている。

県障害者支援課は「障害者スポーツの有名選手を招いたイベントを開くなど、一般の人にも参加してもらえる大会にしたい」としている。

重症障がい児をサポート

公明新聞：2015年7月8日

医療ケアが必要な子どもたちのデイサービスの様子を視察する高木（美）さん（右端）ら＝7日 東京・墨田区
医療ケアの取り組み聞く 都内施設で党委員会

公明党障がい者福祉委員会の高木美智代委員長（衆院議員）は7日、東京都墨田区にあるチャイルドデイケア施設「ほわわ吾妻橋」を訪れ、重症心身障がい児支援などについて調査し、同施設を運営する社会福祉法人「むそう」の戸枝陽基理事長らと意見交換した。

山本博司参院議員、輿水恵一衆院議員、都議・

区議が参加した。

ほわわ吾妻橋は、人工呼吸や胃ろうなど在宅の医療ケアが必要な子どもたちを預かる事業所。1日最大8人を受け入れ、看護師、介護士など医療や福祉の資格を持ったスタッフが



連携して平日 10 時半～15 時半の間で子どもをケアしている。

高木さんらは、デイサービスの現場での医療ケアの取り組みや、童話「おおきなかぶ」を紙人形を使って読み聞かせる様子などを視察。施設管理者の飯村相楽さんは「保護者からは子どもを預ける場所があつて助かったと喜ばれるが、就学後を見据えて不安の声もある」と述べた。

意見交換の席上、戸枝理事長は医療の進歩で救える命が増えた一方で、医療ケアが必要な子どもの数も急増している現状を指摘。医療ケア設備のない一般の保育所では受け入れられないため、自宅で孤立し、不安を抱える重症心身障がい児の家族が多いと力説し、「医療ケアが必要な子どもを地域で支える体制が不十分だ」と訴えた。

また、0～6 歳の医療ケアが必要な子どもの数を国が把握していないことについて、「母数が分からないため対策や制度化ができない」と主張した。このほか、医療ケアの必要度に対応した診療・介護報酬体系の整備や、地域包括ケアシステムに障がい者も組み入れる制度づくりなども訴えた。

終了後、高木さんは、「障害者総合支援法」の見直しを踏まえ、医療ケアが必要な子ども支援について、「国に 0～6 歳の子どもの実態調査を行うことを求め、具体的な対策を進めていく」と述べた。

1 号案件は「ぷろぼの」 - 奈良信金のファーボ奈良 奈良新聞 2015 年 7 月 8 日

奈良信用金庫(大和郡山市、大歳清次理事長)が運営を始める、インターネット上で不特定多数の人から小口資金を募るクラウドファンディングで、県内に特化したサービス「FAVVO(ファーボ)奈良」の第 1 号案件に、障害者の就労自立を支援している社会福祉法人ぷろぼの(奈良市、山内民興理事長)が選ばれた。8 日正午から 90 日間、同法人が雇用する障害者のパソコン購入資金 20 万円以上の出資者を募集する。クラウドファンディングで資金を募るのは全国の信用金庫で初めて。

ファーボ奈良は、地域に特化したクラウドファンディングサービス「FAVVO」を全国で展開するサーチフィールド(東京都)との委託契約により運営する。

ユニクロが資金 5 5 0 0 万円と衣料提供 知的障害者の「スペシャルオリンピックス」に 産経新聞 2015 年 7 月 8 日

ユニクロは 8 日、米ロサンゼルスで 7～8 月に行われる知的障害者による「スペシャルオリンピックス」の夏季世界大会に協賛すると発表した。4 5 万ドル(約 5 5 0 0 万円)の資金、ポロシャツなど計 7 千着の衣料を提供する。

【まぜこぜエクスプレス】 絵本で知る子供の気持ち 産経新聞 2015 年 7 月 8 日

「ボクの冒険のはじまり一家のケンカはかなしいけれど…」(ゆまに書房、1 8 0 0 円+税、提供写真)

『ボクの冒険のはじまり一家のケンカはかなしいけれど…』(ゆまに書房 1 8 0 0 円+税)は、精神科の看護師と医師によるユニット「プルスアルハ」がプロデュースする子供の気持ちを知る絵本。いろいろな家庭の事情により自分を責めてしまう子供に「あなたのせいではないよ」というメッセージを伝え、応援するツールとして作られた。両親の不仲やDVに苦しむリク君がヒミツを打ち明けられる味方を得たことで勇気を出し、「ボクの好き」を見つける冒険に踏み出す様子が、魅力的なかわいい絵と温かな言葉で描かれている。巻末にはまわりの大人が子供に関わる時の対応法も掲載され



ており、実践的に活用できる。

V o 1 . 5 5 みんなに居心地のいい場所を 認定NPO法人 グッド・エイジング・エールズ

前列左から「グッド・エイジング・エールズ」代表の松中権（まつなか・ごん）さん、一般社団法人「Get_in_touch」理事長の東ちづる、カフェチームの橋本美穂さん。後列左からホームチームの増崎孝弘さん、ステーションチームのらんらんさん、ワークチームの川村あさ子さん＝2015年5月16日（t o b o j iさん撮影、撮影協力：カラフルステーション）



「LGBTと、いろいろな人と、いっしょに」を合言葉に、誰もが自分らしく年を重ねていける場所づくりをめざす認定NPO法人「グッド・エイジング・エールズ」。さまざまなプロジェクトに取り組むメンバーに話を聞いた。

おひとりさま時代のヒント

ここ数年、LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）などのセクシュアル・マイノリティ（セクマイ）に関する動きがめまぐるしい。最近では渋谷区のパートナーシップ条例が話題となり、米連邦最高裁判所が「同性婚は合憲」と認めたニュースが世界中を駆けめぐった。とてもうれしいことだが、同性婚が認められただけで、すべてのLGBTが自分らしく生きていけるわけではない。まだまだ多くのハードルがあるなか、グッド・エイジング・エールズには30人を超えるメンバーがプロボノ（職業に就きそのノウハウを生かすボランティア）で参加。「ホーム」「ワーク」「カフェ」などのプロジェクトチームをつくり活動している。

代表の松中権（まつなか・ごん）さんは「自分らしく暮らせる老人ホームをつくること」がひとつのゴール」と夢を語る。その第一歩としてホームチームでは、東京都杉並区阿佐谷にLGBTフレンドリーなシェアハウスを展開しているほか、「LGBTから始まる高齢期のなかま暮らし研究会」として人生の後半に差し掛かった先輩LGBTへのインタビューやワークショップなどを行っている。周囲の理解が得られない時代に青年期を過ごした70～80代では結婚している人が多いが、1990年代以降に当事者としてアイデンティティを持ち、結婚せずに50～60代を迎える独居高齢LGBTが急増中だという。ホームチームの増崎孝弘さんは、「なかには結婚していなくても、さまざまな関係で家族的なモノをつくってきた人もいる。LGBTに限らず、今後おひとりさまが増える時代に、何かヒントがあるのではないかと話す。

多様性表す虹

ワークチームは2012年に、多様性を経営に取り込むダイバーシティ・マネジメントの促進と定着を支援する任意団体「work with pride」を、日本IBM、国際NGOヒューマン・ライツ・ウォッチとともに立ち上げた。人事などのダイバーシティ担当者を対象に、当事者の体験談や先駆的な事例を紹介するイベントを開催。担当する川村あさ子さんは、「採用したLGBTの人が、居心地の悪さから外資系などに転職してしまうのは企業にとって損失。LGBTへの理解は人材流出防止につながり、オープンで働ければ能力をフルに発揮し生産性が向上するというメリットもある」と提案する。

ほかにも、社会人や就職活動中の学生の当事者を対象に、カミングアウトして働く人の話を聞くイベントも企画。「カミングアウトして働く人を知る機会が少ない。ロールモデルを示すことで、不安を解消したい」と、川村さん。

今回、取材を行ったのは東京都渋谷区神宮前の「カラフルステーション」。レストラン、ギャラリー、シェアオフィスを備えた心地よい空間だ。壁一面に飾られたスタイリッシュなモノクロ写真は、シンガポール出身の写真家、レスリー・キーが撮影したもの。多彩なLGBTのポートレートをさまざまなフォトグラファーが撮影し、広く公開することで理解啓発を進める「OUT IN JAPAN」というプロジェクトだ。

担当のらんらんさんによると、「これをキッカケにカミングアウトできたという人もい

る」という。「2020年までに1万人の撮影が目標。スポンサーを探しています」。ステーションチームでは、地元でオフィスをかまえるポット出版とフリーマガジン「神宮前2丁目新聞」を発行するなど、積極的に地域にコミットしている。「LGBTだけでなく、みんなにとって居心地いい空間を増やしていくこと」を目標としているからだ。

その試みの一つとして11年から神奈川県葉山町に夏季限定の「カラフルカフェ」をオープン。今年も4日からカフェと、さらに海の家「UMIGOYA」とのコラボがスタートした。担当する橋本美穂さんは、「最初、地元の人たちは戸惑っていた。でも一緒にお神輿（みこし）をかつがせてもらったりして交流していくことで、人として認めてもらえるようになり、変わってきた」と話す。

インタビューの途中でメンバー5人とも当事者だと知った。言われなければ分からない。LGBTと言っても多様で、カミングアウトしている人、いない人、家族のある人、ない人、さまざまなライフスタイルがある。セクシャリティーにしてもLGBTという枠にとどまらない多岐にわたる人がいるのだ。シンボルのレインボーカラーはそのグラデーションを表現している。

電通ダイバーシティ・ラボの調べでは13人に1人はセクマイ。これは、どの学校のクラスにも、どの企業にも必ずセクマイの人がいるということ。その人たちが働きづらくないか、生きづらさを感じていないかと考えなければならないということ。セクマイが暮らしやすい社会は、誰もが暮らしやすい社会。レインボーカラーはセクマイにとどまらず、広く多様性も示す色に見える。(一般社団法人「Get in touch」代表 東ちづる／撮影：フォトグラファー tob o j i／撮影協力：カラフルステーション／SAN KEI EXPRESS)

太陽の家50周年記念シンポ 「輝く障害者の集合体に」 大分合同新聞 2015年7月9日



「太陽の家の使命とこれからの障がい者支援のあり方」について意見を交わすパネリスト＝8日午後、別府市の太陽の家コミュニティセンター

別府市の太陽の家で8日、創立50周年記念シンポジウムがあった。半世紀にわたる障害者支援の歴史を振り返り、社会福祉法人や障害者スポーツ団体の役員ら6人のパネリストが今後の支援の在り方などを話し合った。

三菱商事常任監査役で太陽の家顧問の鍋島英幸さんは、共同出資会社「三菱商事太陽」の社員95人中61人が障害者だと説明。「全国的に障害者雇用が進まないのは、障害者を仕事に慣れさせる経験、知識が足りないから。太陽の家が企業に情報を発信してほしい」と提案した。

パネリストからは太陽の家の歴史を踏まえた上で「太陽のように輝く障害者の集合体のような存在になってほしい」「障害者スポーツの拠点であることを再認識し、さらなる取り組みを」といった期待が寄せられた。一方で障害者福祉の課題として、障害者の高齢化や重度障害者・精神障害者の雇用などを指摘した。

社会福祉法人太陽の家の中村太郎理事長は講演で、障害者支援に加えて近年は高齢者福祉の分野にも進出し「ソーシャルインクルージョン（包容力のある社会）」の実現に力を注いでいることを紹介。「人間の尊厳が保たれる社会を目指したい」と強調した。

障害者アート 胸に堂々

読売新聞 2015年07月09日

◇奈良でTシャツ展示会

障害者の芸術活動を支援する奈良市の「たんぼぼの家アートセンターHANA」のギャ

ラリーで、全国の障害者福祉施設の利用者らがスタッフと共に製作したTシャツを紹介する展示会が開かれている。18日まで。

全面に大きくジャッカルがあしらわれたものなど、個性豊かなTシャツが並ぶ会場（奈良市で）

福祉施設や支援団体などに呼びかけて集められた約60種類を展示。バーベキューコンロで肉や野菜を焼いている絵を縫いつけた「バーベキューTシャツ」など、個性豊かなTシャツが並ぶ。一点物が多く、2000円から1万円台で販売している。



担当の渡辺弥生さん（26）は「一風変わったTシャツは、会話の種にもなる。ぜひお気に入りを見つけてほしい」とPRしている。

入場無料。日曜と月曜は休み。午前11時～午後5時。問い合わせは同ギャラリー（0742・43・7055）。

自由な表現の書50点 障害者5人が作品展 三木

神戸新聞 2015年7月8日

自由に表現した書を出品した片山悠也さん＝三木市与呂木

知的障害者5人の書道展「片山悠也と仲間たち」が8日、兵庫県三木市与呂木のギャラリー驟で始まった。同市上の丸町の片山悠也さん（27）の作品を中心に約50点が並ぶ。19日まで。

5人は、障害の有無を問わず書を楽しむ市内の催し「きらきら書道」の参加者。その15周年を記念し、主催するボランティアグループ「人権書道きらきら」が作品展を開いた。



身元不明39人、府HPに

読売新聞 2015年07月09日 大阪

認知症や知的障害などがある身元不明者が全国の市町村で保護されている問題で、府は8日、保護時の服装や身体的特徴などを掲載する府のホームページ（HP）に新たに37人分の情報を掲載したと発表した。昨年9月のHP開設後、掲載は2人にとどまっていたが、府が市町村へ働きかけ、府内で保護されたほぼ全員の掲載にこぎつけた。

昨年8月の厚生労働省の通知を受け、府もHPを開設したが、1月に男性、3月に女性の情報を掲載しただけだった。HP掲載が個人の特定につながることを市町村が危惧したため、府は本人の同意なしに写真や名前などの個人情報は掲載しないとのルールを改めて周知。市町村の協力でこの日、37人分を追加した。

府内で保護されている身元不明者は40人（5月末時点）。HPに掲載した39人は、1961年から今年1月に保護された男性29人、女性10人。保護日と推定年齢のほか、「右こめかみにほくろ」「茶色ライン入りジャンパー」などと特徴を記した。残る1人も自治体との調整がつき次第、掲載する。

個人情報は府内の全警察署に備え付けている「身元不明迷い人台帳」などで確認ができ、府は「HPを見て心当たりがあれば、地元の警察署に連絡してほしい」としている。



HPは、<http://www.pref.osaka.lg.jp/kaigoshien/mimotofumei/index.html>

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行